



思春期の子どもたちの 心の声に耳を傾けて ——小さな神様からの贈り物

学校へ行くことができない。拒食と過食を繰り返す。非行を重ねる。そんな子どもたちの心の奥底に流れる「より良く生きたい」という声なき叫び。そんな心の声に触れる私の人生は、まさに「小さな神様からの贈り物」であると思っています。

「鍵を掛け、車から1時間以上
出て来ない子がいる」

平成17年5月、教職を退き町の公民館に勤めていた私に、ある小学校からその後の人生を決める一本の電話が掛かってきました。長野県教育センター在職当時、私の講座を受講していた養護の先生からの電話で、「学校の駐車場で車に鍵を掛け、出て来ない小4の不登校児がいる。来て、彼の話を聞いてあげてくれませんか？」と言うのです。その出来事をきっかけに、私はボランティアで思春期の子どもたちとその親たちを対象にした相談室を始めました。

以来勤務時間終了後の夕方から、その小4の不登校児と彼の親の相談を受けるようになりました。さらに他の子どもたちや役場職員からの相談も入ってくるようになったため、昼食後の休憩時間も相談・カウンセリングの時間に当てるようになっていきました。来室者数が増え、「勤務時間の枠の外で行うのはそろそろ限界かな」と感じ始めたちょうどその年の10月、私が勤めていた公民館があった町を含め、近隣の5つの町村が合併し、安曇野市が誕生しました。そして18年11月、新設の安曇市立教育相談室の室長として相談業務とともに教育相談構想作成を任されたことで、さらに来室者が増え、4歳児から32歳までの青少年やその親・祖父母・教師・相談員・福祉関係者等、幅広い人々から相談を受けるようになっていきました。相談内容も、不登校・いじめ・発達障がい等の「教育相談」だけでなく、摂食障がい・引きこもり等の「思



川名 洪良

思春期相談室「せせらぎ」相談員

【かわな・こうりょう】

1944年、中国大連市生まれ。長野県内小中学校及び在ジャカルタ日本人学校、長野県教育センター、安曇野市教育相談室等に勤務。退職後に、思春期の子どもたちとその親たちを対象とした相談室「せせらぎ」を開設。週2回、無料で相談を受けつけている。

春期相談」へと広がっていき、結局相談室を去るまでの6年4カ月の間に、延べ7000人（市報告数）が相談室を訪れました。相談室で相談・カウンセリング・講演に精を出した歳月は、私にとつてやりがいある充実したまさに生きがいの時間であり、瞬く間の6年4カ月でした。任期の最終日には、来室者の方々から感謝・戸惑い・嘆き・涙の言葉や手紙、花束等をいただきながら、「ありがとうございます」と何度も繰り返しつつ、相談室を去りました。

「部屋を借りました」

その後、電話や手紙、自宅訪問等で「相談を継続してほしい」との声をいくついかいだきながらも、私は市の相談室の邪魔をしてはいけないという思いから依頼を断り続け、退職後の生きがいづくりの1つとして続けていた合唱団での活動に熱中し、新



「せせらぎ」を開設した信濃教育会生涯学習センター前にて



新しい生きがいは弓道

たに弓道も始めました。

その生活が軌道に乗り始めた25年6月、2人のお母さんから「松本市の公民館に部屋を借りました。代表者には私たちがなりますから、ぜひ相談室を立ち上げて下さい」というお電話をいただきます。その電話が私の心を大きく動かし、パートナーとしてMさんを誘い、「不登校等で、心に悩みや傷を持つ子どもの成長を促すとともに、学校復帰及び生活の改善の場とする」思春期相談室「せせらぎ」を、十数人の親子を対象にして始めました（現在は信濃教育会生涯学習センター内へ移転）。

相談室立ち上げの背景

このような経緯で「せせらぎ」を開設することとなりましたが、立ち上げた背景には、私なりに現代社会を生きる子どもたちへの思いがありました。

現在世の中の動きは急激にして大きく、かつ将来への展望が見えにくい状況にあるため、未来への夢や希望を描くことができず、自立への道のりに不安を抱え、苦悩する子どもが増えています。不登校・いじめ・引きこもり等、様々な問題が典型的な形として現れ、深刻な社会問題となっています。

また子どもをめぐる様々な問題の背景には、家庭崩壊・家族関係の荒廃・家庭内暴力等、家族をめぐるさらに深刻な問題が隠されている場合が多く、学校生活に困難を抱えている子どもたちが心身ともに健やかに成長すると同時に、家族や関係者を支えていく相談が一層必要となっています。

「せせらぎ」は、そういった苦悩する子どもたちを支えたいという思いから立ち上げたものです。

ジャカルタでの生活が子どもに対する考え方を変える

そもそも私が、不登校の子どもたちに対する考え方を変えたきっかけは、現役時代ジャカルタ日本人学校に3年間赴任したことが、大きな転換点となっています。

インドネシアの学校では、目・髪・肌の色や文化が異なった子どもたちが、1つの教室で勉強していました。そこは日常生活の中で、「異なっていること」が当たり前の

世界でした。これに対し日本の学校では、同じ目・髪・肌の色と文化を持った子どもたちが、1つの教室で勉強しています。

異なっていることが当たり前の世界と、同じことが当たり前の世界の差異は、かなり大きいように感じられました。インドネシアの学校が、異なっていることの中で自己を要求される世界であるのに対し、日本の学校は、同じものの中で、自己を合わせることを要求される世界です。

2つの世界を見比べるうちに、「学校に行くのは当たり前、学校で生きている子どもたちは良い子であり、そこで生きることができない子はふつうの子ではない、という意識が私たちの中にはないだろうか?」「苦悩する子どもたちをマイナスイメージでとらえ、不登校児」というレッテルを貼ることにどれほどの意味があるのか?」という疑問を抱くようになりました。

相談・講演をしている上で、たびたび尋ねられること

子どもたちの相談を受けつける日々が続けていると、たびたび「不登校の子って、どういう子なんですか?」と尋ねられることがあります。そんな時、私はこう答えています。



不登校だったある5年生の子どもに、何も条件をつけずに「3本、傘を描いてくれる」とお願いし、描き終わった後に「これは誰の傘？」と尋ね、それぞれ誰の傘か書いてもらった絵

「つり橋を渡る時に、橋の真ん中で思わずそっこ（底）を見て、怖くてうずくまっている子なんです。私のような鈍感な人間は、そっこを見ないで知らず知らずのうちに橋を渡ってしまう。その人間が、うずくまっている子どもに、怖くないからこつちへおいで」と言っても怖いものは怖いわけです。だからうずくまっている子どものところへ行つて、その怖さを共有しながら一緒に歩いて渡るのが、相談員・カウンセラーの仕事だと思っています」。

また「どうして相談・カウンセリングをしているのですか、ライフワークですか？」と根本的な質問をされることもあります。私自身は特別大それたことを考えているわけではなく、困っている人・悩んでいる人が来るからやっているのだと思いますし、教師として相談員として、そして人間として、来室者から私自身の成長のための贈り物をいただき、それが何よりの生きがいとなっているからではないかと思えます。

これまで見聞きた事例

長野県教育センター・安曇野市教育相談室・思春期相談室「せせらぎ」等で相談・講演活動が続けてまもなく30年。子どもたちやその親たちから様々なことを教えていただき、人間として成長させてもらっています。以下に、これまで見聞きた事例を少し紹介させていただきます。

■相談室にダンボールを持ち込む不登校の少年

ある日、彼は相談室にダンボールを持ち込むと、その中へ入ったまま出てきません。恐らく、相談室はまだ彼にとつて安心できる場所にはなりきれておらず、ダンボールはお母さんの胎内だったのかもしれない。私は彼と一緒にダンボールの中に入つて遊び、話を聞きます。

■登校時にお父さんの背広を着て来る少年

この子は突然お父さんを亡くしました。そのため背広を着ると、「お父さんと一緒にいる」という気持ちになれたのかもしれない。背広にお父さんの匂いを感じるのかもしれない。悲しみに必死に耐え、生きる彼を抱きしめずにはいられません。

■クッキーを、不登校の友人に届ける少年

様々な事情から再び不登校がちなったこの少年は、同じく不登校になっている級友に、授業で作ったクッキーを届けに行つたそうです。彼は家庭に居場所のない「家なき子」、または家庭や学校で本音が言えない「言えなき子」だったのだと思います。

このような不登校の子どもたちは、生育上の発達課題を獲得せずに通り過ぎてしまつて、もう一度やり直す、いわゆる育ち直しをしている。そんなケースもあります。しかし、子どもが不登校になったことで親が変わり、家族関係が修復する。家が変わるというケースもあります。

苦悩する子どもたちに対する社会の意識を変えたい

(1) 原因追求から意味探求へ

かつて不登校の子どもたちは、「忘れていたのではないか」「甘えているのではないか」と受け止められる傾向があり、「何が悪かったのか」「誰が悪かったのか」という、原因探しや悪者探しを検討することが多かったように思います。しかし、そういったマイナスイメージで彼らを見ていては、支援の鍵である豊かな人間関係を築くことはあまり期待できません。

それに対し、「不登校は、その子の成長や学校・家族・社会を含めた周囲の生き方にとつて、何らかの意味のあることに違いない」と考えた方が、彼らを理解しそのメッセージを聞き取ることができのではないのでしょうか。不登校の子どもたちは、自分の幸せや生活全体をあえて犠牲にし、その子だけが持つ苦しみを訴えているように思われます。従つて、「原因」を追求するよりも、その子の言動が表す固有の「意味」を探究していく方がより建設的であり、その後の展望も開けるように思います。

(2) 治療ではなく、心の成長を

このように考えると、不登校というのは心の病気というよりも、「その子固有の心の傷・不安・悩み・苦しみ」ととらえた方が良さそうです。不登校を病気ととらえると、治療するという考え方になります。し



不登校の子どもたちが折った折り紙

かし、病気ではなく子どもたちからのメッセージととらえると、彼らの生育をふり返り、心の栄養を取らせ、エネルギーを補給してやるが必要になってきます。彼らとの温かく豊かな人間関係の中で、時には教師というペルソナ（仮面）を外してのつき合いも求められます。そのように接しないと、本当に病気になってしまいます。

学校（社会）不応応か、子ども不応応か

不登校の子どもたちと向かい合う時は、まず家庭や学校や社会が彼らにどのような応えようとし、何をまだしないままにしているのか。彼らにとって今そこはどんな場所になっているのか、彼らとの関係はどうなっているか等を、再度見返すべきだと考えています。

学校側から見ると、不登校の子どもたちは「学校不応応」なのかもしれません、不登校の子どもたち側から見れば、学校が「子ども不応応」なのかもしれません。「適応」は学校と子どもたちとのダイナミックな相関作用のはずです。子どもたちが自分を変え、学校に合わせていくことも必要ですが（そのためには、教師や関係者の支援がとて大切になってきますが）、その前に教師（学校）が、自分を子どもたちにどう適応させていくかがとても重要になってきます。それが不登校を通して、子どもたちが教師や学校に訴えていることのように思われます。

不登校の子どもたちのために、水を汲みたい

人は死にますが、動物は死にません。人間は生を意識し、死を意識します。だから死ぬわけです。一方動物は生を意識しませんし、死を意識しません。だから、動物は死ぬのではなく生を終えるのだと私は思っています。子どもたちが、不登校になったり心身症になったりする原因は、この生死に関する人間独特の感覚が影響を与えているのだらうと思います。

しかし同時に、子どもたちは、「より良く生きたい」という願いを心の奥底に持っています。その願いを受け止め認めてもらうことにより、不安だとか自信のなさだとか疎外感を克服し、自分らしく成長していく

きます。子どもの心の鍵は、外側ではなく内側に掛かっています。だから、自分で開けないと開かないわけです。

治すのではなく、心の成長を支援する。たとえるなら、水を汲むようなものです。水は掴もうとすれば指の間から抜けていきますが、汲もうとすれば一滴の水が汲めます。その一滴で自分の喉を潤すこともできますし、子どもたちの心を潤したり、唇を拭いてやることもできます。私のような者は心を掴むことはなかなかできませんが、汲むことぐらいだったら少しはできるかもしれない。そう思うのです。

きれいに歳を取る

相談員の私と来室者の関係は、支援する人とされる人という関係もあるかもしれませんが、むしろ一緒に成長する関係であり、私も私の知らない人生を、子どもたちやその親たちから学び、成長する場であると思っています。

子どもたちの心の傷や、親たちの悲しみを少しでも背負いながら、きれいに歳を取りたい。60歳を過ぎてからの私のささやかな願いです。

